

〔論文〕

船霊信仰における船玉神社の役割と祭祀 —香川県沿岸地域を事例に—

関 泰子 倉田 健太

— 目 次 —

1. はじめに
 2. 船霊信仰とは
 3. 香川県における船霊信仰の概略
 4. 船霊信仰の現代の変容
- 結論

キーワード：香川県、船霊信仰、現代社会と呪術

1. はじめに

船に宿る精霊が船乗りたちを守るとする「船霊信仰」の起源は古く、その記述は続日本紀にまで遡る。神仏習合時代の船乗りたちは、航海の安全を船霊や海神に頼り、帆柱に船霊の御神体を埋め込み、崇敬する神札を船に祀っていた。

船霊信仰については、現在でも日本各地の博物館や民俗資料館において展示され、また過去からの研究の蓄積も多い。また、金刀比羅宮、住吉大社、宗像大社等は、昔から海を守る神社として船乗りたちに篤く信仰されており、現代におい

SEKI, Hiroko 四国学院大学社会学部 教授、比較社会学・東南アジア地域研究

KURATA, Kenta 総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻 博士後期課程1年

ても神札を求めて参拝する人びとは多い。他方、日本各地には、単立神社もしくは摂・末社として、船玉（魂）神社と呼ばれる神社が多数残されている。古代以来、海運業の中心地の1つであった瀬戸内沿岸地域にも、多くの船玉神社が存在する。船玉神社が何を祀り、誰が何のために信仰していたのか、船乗りたちの船霊信仰とどのように関係していたのか、この点については、現在ほとんど知られていない。

筆者の一人である関は、タイ・ミャンマー両国における「船霊信仰」について長年に渡り研究を続けてきた。タイ、ミャンマー両国の漁民・船乗りの間では、日本同様「女性が男性の航海を守る」という船霊信仰が存在する。特に、ミャンマー東南部の漁民の間では、現代においても船霊は熱心に信仰され、またその信仰実践は、神仏習合期の日本のそれに酷似している。つまり、「女性が男性の航海を守る」船霊信仰と共に、海神や個々の守護神・仏像を船に持ち込み、航海の安全や豊漁を祈願するということである（関 2017:52-53）。ミャンマー漁民の宗教実践は、船霊を中心に海神、村・地域の守護神、仏教への信仰を組み合わせたものであり、ある意味合理的な体系となっている。

他方、日本における船霊研究は、その研究は古く、蓄積は多いものの、漁村の衰退と共に現在ではあまり関心を集める対象ではなくなっている。しかし、漁業関係者や船員の間では、いまだに船内に神棚を設けるケースは少なくない。いわゆる船内神社である。そこには、海洋安全にご利益があるとされる神が祀られている。前述の金刀比羅宮や住吉大社は古代から漁民・船乗りの間ではよく知られた存在である。しかし、漁民やその船を守る存在として、もう一つ「船玉（魂）神社」が知られている。通常、「船玉」「船霊」と呼ばれるものは船に宿る存在であり、船大工が、船の柱の根元にご神体となるものをはめ込み、船霊とするものである。そもそも船霊は船に宿るから「船霊」と呼ばれる。それでは、この陸に上がった「船玉（魂）神社」には何が祀られ、どのように信仰され、祭祀されてきたのだろうか。

本稿では、香川県沿岸地域に残るこうした船玉神社を事例に、従来、ほとんど知られていない陸の「船霊さん」である「船玉神社」祭祀について、船霊信仰との関わり、信仰の目的、祀り方等について、フィールド調査に基づき明らかにすることを目指している。

2. 船霊信仰とは

「船霊」とは、船に宿る精霊のことで、船乗りや漁民の間で古代から信仰されている航海安全と豊漁の守護神である（楠本 1993：207）。続日本紀にすでにその名が現れている日本古来の信仰であり、船霊は時化や災難、風や大漁を「鈴虫が泣くような音」で船人に知らせると言われる（川崎 1984：336）。日本における船霊研究は、民俗学を中心に昭和初期から始まり、日本各地の漁村で、盛んにその実態調査がなされてきた。

よく知られた「船霊」信仰は「御神体（男女一対の人形、サイコロ、髪の毛、五穀、古銭）」を帆柱を支えるツツに作った小さな穴に埋め込む⁽²⁾（神野 2000：130）。地方によっては、船主の家に「船霊様」を祀ることもある（野口 1972：251）また、日本の「船霊」は一般的に女神と考えられており、女神の嫉妬を恐れるため、漁船は女性の乗船を嫌うという伝承がある。また、御神体としての髪の毛の採取、儀礼の担い手として女兒を重要視する地域も多い。

鹿児島を中心とした九州の民俗について研究する下野敏見は、船魂信仰は、青森県から鹿児島県の吐噶喇列島の間に存在する信仰であるとし、女性が男性の航海を守るというのが船魂信仰の核心であると述べている（下野 2005a: 312）。吐噶喇列島以南の沖縄地方に船魂信仰が存在しないのは、沖縄にはすでに生活全般において「女の霊力によって男性が守られる」というウナリガミ信仰が貫徹しているため、敢えて船魂を祀る必要はないからだという（下野 同上）。つまり下野によると、船魂信仰とは、ウナリガミ信仰に基づく信仰とみなされるのである。

昭和30年ごろまでの船魂様は、ほとんど決まった形になっていたのです。特に南九州地域では、数え歳7歳の女の子が夜中に、その前におばさんから教えられた通り、表の間に入って鋏で自分の髪を切り、用意された半紙に綺麗におくのです。薩摩では紙雛をこしらえて子供に与えていましたが、あのような雛人形を作るのです。

少女の髪の毛を丸めて小指ぐらいにし、紙雛風に作るわけです。その長さはおよそ二寸五分から三寸ぐらい。それを男雛と女雛の二体作り、男のものは麻を使い、女のものは黒髪を使うという例も見られます。こうして作った船魂を無言のままもらって、そして船の所に行きます。船大工は誰も見てい

ない所で一人、その船の帆柱の下支柱の所に穴をあけて、そこに船魂を入れたのちふさいで、そして拝むのです。そのときに供える品物が櫛、口紅、鏡など、女性の化粧道具を中心に、神酒、餅、茶、米、塩、大豆などです。(下野 2005:310)。

この他にも、五穀を加えたり、口紅・白粉などの化粧品を添えたりする例も存在する(牧田 1966:160)。毛髪についても、前述の下野の記述にみられるとおり、女兒の髪の毛を納める場合の他、船主／船頭／船大工の妻の毛髪、あるいは男女の毛髪を納める地域も存在する。人形についても、男女一対ではなく、女の人形だけの場合もある。牧田茂は、これらの御神体のうち、もっとも古いのはウナリガミ(ヲナリ神)信仰につながる毛髪であり、人形や十二文銭、賽子は後世付加されたものであると考えている(牧田 1966:176)。

一方で、男神のイメージで捉えられる伝承もあり、船霊＝女神図式が定着している初期の「船霊」研究に対して、再度、多方面から検討する必要があるという意見も存在する(神野 2000:145)。しかし、船霊が女であるという伝承は全国にわたってみられるものであり、船霊信仰の中に、こうした「女性の霊性」を特別視する信仰が存在することは間違いない。また、地域によっては、大きな船には御神体をいれるが、小舟にはないところや、船霊信仰は存在するが、船の大小にかかわらず御神体というものが⁽³⁾ない地方も存在する(牧田 1966:153)。

また、明治まで長く続いていた神仏習合期の漁民は船霊様だけでなく、信仰する神仏も船内に祀ることは普通に行われていた。関山守彌『日本の海の幽霊・妖怪』によると、江戸時代、時化が続いて操船の自由が奪われた船乗りたちは、髪を切り、それを船霊様や船内に祀ってあった神仏に備えた。祈願の対象となる神仏は、船霊の他に、伊勢大神宮、金毘羅大権現、観音菩薩、さらにそれぞれの乗組員が信仰する神仏などであった(関山 2005:124-125)。この他にも、龍王様・龍宮様とよばれる「海の神様」や網霊様といわれる「網の神様」それに「漁の神様」としての夷様などが、その生業に深い関係のある神として信仰されてきた(牧田 1966:134)。

船霊は、若い水夫の夢枕に立ち、これから起きる出来事を告げたり、(関山 2005:92)、「チチチ…」という音で遭難を知らせたりする。また、神仏習合時代の日本の漁民たちは船霊だけではなく、同時に神仏も船に祀るのが普通であった。

それは伊雑宮であったり、金比羅さんであったり、エビス神であったりする。自分たちが信仰する漁業の神・海を守る神仏である。壱岐・対馬の山の頂には、村人の氏神ではなく、航海業者や漁業者の神が祀ってあった（関山 2005:170）。また、信仰する神仏により禁忌も発生する。例えば、金毘羅さんを信仰する船乗りはカニを食べない（関山 2005:208）。

東南アジア大陸部に位置するミャンマーの船乗りは、やはり船霊を「ラマインシマー」「マンシマー」等と呼ばれる若い女性の精霊であるとし、船首部分にバウンドと呼ばれる紅白の布を巻き、船霊の象徴とすると共に、船首／船室に船霊への供物として若い女性の衣服・化粧品・装身具などを詰めた箱を供える。しかし、船霊の力だけでは不十分とし、さらに船室内に海の神であるウー・シンジーを祀り、仏像を置く。出航前には村の守護霊もしくは地域の守護神であるポーポーに豊漁や航海の安全を祈願する。ミャンマーの漁民たちには、船を守るのは船霊、海を制御するのは海の神、船乗りたち自身を守るのは村や町の守護神、と神々の間に役割分担が存在する。航海中は牛や豚を食べないという禁忌を守る。「船霊が嫌うから」と彼らは説明するが、そこには仏教の五戒を守ることにより船霊の好意を得ることが出来る、という仏教と精霊信仰の習合がうかがわれる。

3. 陸の船霊信仰「船玉神社」

民俗学を中心に盛んに船霊研究が行われてきたことは、前章で述べた。しかし他方で「船玉（魂）神社」についての記述は少ない。

遣唐使船の発着で知られる大阪、住吉大社は、底筒男命、中筒男命、表筒男命、そして神功皇后を祭神として祀る、摂津国の一の宮である古い神社である。海の神を祀る神社として名高いこの住吉大社境内には、「船玉神社」と呼ばれる小さな社がある。船玉神社は境内社であるが『延喜式』に記載されている式内社でもある。住吉大社のホームページによると、「船玉とは、船舶そのものの神霊で、住吉大神とは表裏一体の関係」であり、時に「住吉大神の荒魂」であるというが、⁽¹⁾2012年まで住吉大社の宮司であった真弓常忠の著作『住吉信仰—いのちの根源、海の神』（2003）において、同氏は古来から船乗り・漁民が同神社によせた篤い信仰について述べているが、住吉大社とは表裏一体の関係にあるはずの船玉神社

の由来については全く触れられていない。

さて、この住吉大社の境内社である船玉神社に祀られている「船舶そのものの神霊＝船玉神」であるが、祀られている神は天鳥船命と猿田彦である。主祭神である「天鳥船命」は神が乗る船の名称である。この「天鳥船命」を主祭神として祀る神社もいくつか存在するが、必ずしもこの神を「船玉神」として祀っているわけではない。また、後の章で詳述するように日本各地に存在する船玉（魂）神社は、どれもみなこの天鳥船命を祀っているわけではない。

前述の通り、船霊信仰の研究論文において、船玉神社についての記述は殆ど見られないが、その中で、牧田の研究は船霊信仰と船玉神社の関係について述べている数少ない事例である。牧田は昔の人びとが船霊をどのような神仏と考えていたか、という観点から整理をしているが、日本の古典によって解釈したものには、1)住吉大明神 2)猿田彦神の2説があった(牧田 1966:142)。牧田は、これらの説は当時の民間信仰を基礎にしており、神社として祀られている場合には、これらが祭神となっている場合が多いと述べている(牧田 1966: 143)。他方、船玉神社に、地域の漁民たちが古くなった船や解体する船から取り出した船霊の御神体を併せて祀ったという可能性も考えられようが、後に述べるように香川県の船玉神社ではそのような事例は見られず、⁽⁵⁾船玉神社が漁民・船乗りの信仰の中から自然発生的に生まれた存在とは考えにくい。

他方で仏教の影響を受けた船霊解釈も存在し、釈迦如来や大日如来に例えられる場合や、観音信仰と結びついている地域もあった(同上)。しかし、船霊信仰は仏教伝来以前から既に存在していた古い信仰であり、これら神道的・仏教的な船霊解釈は、当時の民衆の伝承を根拠とした知識人の解釈であると言える。また、前述の通り、漁民・船乗りの間の伝承においては、ほぼ全国で船霊は女性と考えられているため、船玉神社の祭神が男神であることと矛盾している。牧田は、船霊＝女性説が定着した理由として、1) 船そのものが女性であるが故に船の精霊たる船霊も女性であるとする考え方、2)船霊に仕えていたのが主に女性であった、の2説をあげている(牧田 1966:206-207)。牧田自身は後者の説を支持しているように思えるが、いずれの説であるにせよ、こうした女性性を強調する船霊信仰と男神を祀る船玉神社とのつながりは希薄である。

それでは、各地の船玉神社はどのような神を祀り、誰によって祀られているの

か、また祭祀の担い手は、船上の船霊と船玉神社をどのように区別して祀り分けているのか、香川県沿岸地域を事例に詳しくみていきたい。以下の章は、2015-2017年にかけて、日本全国に散らばる船玉神社をデータベース化し、さらに瀬戸内海の船玉神社を事例として取り上げ、実際の祭祀において、どのように船上の船霊祭祀と区別しているのかについて、フィールド調査を行った結果に基づく。

4. 船玉神社データベースに見られる船玉神社分布⁽⁶⁾

改めて、本章で使用する船玉神社データベースの詳細について触れておくと、神社本庁が1990-95年に実施した「全国神社祭祀祭礼総合調査」にもとづく「平成「祭」データ（以下、祭データ）」⁽⁷⁾を使用した。そして、主には瀬戸内海沿岸地域を対象に、祭データ上で掲載されていない船玉神社のうち、ウェブサイト上で確認できたものを加え、整理・構築している⁽⁸⁾。

まず、船玉神社分布について、香川県沿岸地域に範囲を絞る前に、日本国内ではどのような分布となっているのかを見ていく。具体的には、国内の神社のうち「船玉」と冠する社名に限定して⁽⁹⁾、その一覧を提示すると、まず、本社に確認された船玉神社が以下となる（表1、図1）。

簡潔にまとめると、全国13道県に18社が存在しており、その鎮座地は、大半は沿岸部や湖畔といった水辺に集中している。祭神は、猿田彦と住吉神を祀る神社が9社となっており、概ね前章で示した牧田説に従うものであるが、長野県の建御名方命や神奈川県の弟橘姫命など当地での信仰の厚い祭神や、記紀神話上で神の船とされる鳥船神、または神話上でもとくに知名度の高い天照神のような神も混在しており、一様ではない。またそのうち、由緒が掲載されている6社を確かめると、例えば、1の船玉稲荷神社で「寛永年間に松平直政公が出雲に御入国になってから、松江藩の御舟方はこの稲荷大明神に住吉の三神を祀り、海上安全・船舶の守護神とされ」、14の船玉神社では「「大船（おおかい）引き」と言う職人たちが住人で船大工や玉縄城の御用などしていたと言われています」とあるように、その地を治める大名が海上安全祈願を目的としたり、職能集団が住む地域に建立された記載が見られる。

表1 本社として確認された船玉神社の一覧⁽¹⁰⁾

	神社名	祭神	鎮座地
1	船玉稻荷神社	倉稻魂命	島根県松江市東本町5丁目59
2	船魂十二所神社	天鳥船命, 表筒男命, 中筒男命, 底筒男命, 天揖取命, 少彦名命	新潟県村上市大字山辺里769番地甲
3	船玉神社	猿田彦命, 誉田別命	茨城県東小美玉市大谷632
4	船玉神社	表筒男命	茨城県筑西市船玉248
5	船玉神社	鳥船神	香川県高松市香西本町751
6	船玉神社	鳥船神	香川県高松市生島町685
7	船玉神社	底筒男命, 中筒男命, 表筒男命, 天照皇大神, 応神天皇	秋田県大仙市協和船岡向小沢13
8	船玉神社	上筒男命, 中筒男命, 底筒男命	新潟県胎内市荒井浜1068
9	船魂神社	伊弉諾尊, 伊弉冉尊, 猿田彦命, 底筒男命, 中筒男命, 表筒男命	鹿児島県鹿児島市新屋敷町5-15
10	船魂神社	建御名方命	長野県岡谷市湊3-3-3
11	船玉神社	猿田彦命	山形県酒田市高砂4-3
12	船玉神社	猿田彦命	山形県飽海郡遊佐町比子字服部興野51
13	船玉神社	住吉四柱神	新潟県村上市平林2016
14	船玉神社	弟橘姫命	神奈川県藤沢市大鋸2-4-12
15	船玉神社	天照皇大神 ⁽¹¹⁾	石川県能美郡川北町字舟場島二65
16	船魂神社	豊玉毘売神	宮城県石巻市雄勝町船越天王山4-2
17	船魂神社	塩土老翁神, 大綿津見大神, 須佐之男大神	北海道函館市元町7-2
18	船霊神社	大綿津見命	千葉県市原市青柳2-1

出典：神社本庁教学研究所研究室編（1995）「平成「祭」データ」（CD-ROM）全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会にもとづき倉田作成。

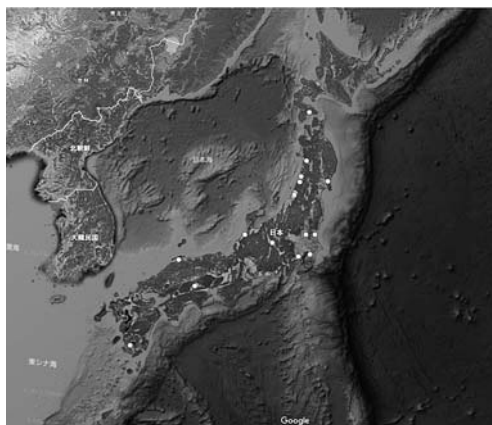


図1 本社として確認された船玉神社の位置関係（Google Mapより）

次に、本社ではなく、各神社に境内社として名が見られる船玉神社をあげると、以下の通りである（表2、図2）。

表2 境内社として確認された船玉神社の一覧

	境内社名	祭神	鎮座地	管理神社
1	舟玉神社	天鳥船大神	大阪府堺市堺区甲斐町東2-1-29	開口神社
2	舟玉神社	猿田彦命, 天鈿女命, 八重事代主命	静岡県榛原郡吉田町住吉2212-1	片岡神社
3	舟玉神社	船玉大神	広島県尾道市土堂2-10-12	住吉神社
4	舟魂神社	猿田彦命	新潟県佐渡市沢根595	白山神社
5	船玉神社	《配》大物主大神, 住吉大神, 崇徳天皇, 豊受姫大神, 八幡大神, 天照皇大神	大阪市西成区玉出西2-1-10	生根神社
6	船玉神社	住吉大神	香川県綾歌郡宇多津町1644	宇夫階神社
7	船玉神社	船玉大神	大阪府大阪市此花区伝法2-10-18	鴉宮
8	船玉神社	船玉猿田彦命, 事代主命	鳥取県鳥取市賀露町北1-21-8	賀露神社
9	船玉神社	大国主命	鳥取県東伯郡北栄町江北2701	北野神社
10	船玉龍神社	大綿津見神, 高麗神	神奈川県足柄下郡真鶴町真鶴1117-□	貴船神社

11	船玉社	船玉神	和歌山県御坊市塩屋町北塩屋1146	塩屋王子神社
12	船玉神社	鳥船神	香川県高松市神在川窪町101	住吉神社
13	船玉神社	猿田彦命	福岡県福岡市博多区住吉3-1-51	住吉神社
14	船玉神社	天鳥船命, 猿田彦神	大阪府大阪市住吉区住吉2-9-89	住吉大社
15	船玉社	蛭児神	島根県松江市朝酌町970	多賀神社
16	船玉神社	住吉大神	静岡県静岡市清水区岡町2-3	八幡神社
17	船玉神社	猿田彦神	福井県小浜市小浜男山10	八幡神社
18	船玉神社	底津綿津見神, 中津綿津見神, 上津綿津見神	静岡県榛原郡吉田町川尻1603	八幡津島神社
19	船玉神社	不明	福井県小浜市北塩屋20-11	宗像神社
20	船玉神社	船玉主命, 大綿津見神	島根県安来市安来町1404	安来神社
21	船魂神社	猿田彦神	香川県坂出市大屋富町2313	巖嶋神社
22	船魂神社	猿田彦命, 三筒男命	香川県坂出市王越町乃生1780	梅宮八幡神社
23	船魂神社	船魂の神	和歌山県日高郡みなべ町埴田20	鹿島神社
24	船魂神社	猿田彦命, 上筒男命	香川県坂出市王越町木沢1621	喜佐波神社
25	船魂神社	不明	越智郡上島町弓削上弓削3	高浜八幡神社
26	船魂神社	大綿積命	福島県いわき市鹿島町上蔵持滝浪9	白山神社
27	船魂神社	猿田彦命	京都府宮津市宮町1408	日吉神社
28	船魂神社	底津綿津見神	宮城県名取市閑上2-3-17	湊神社
29	船魂社	船魂大神	大阪府大阪市大正区三軒家東6-14-12	八阪神社
30	船霊神社	綿津見神	福島県いわき市四倉町西三丁目61	諏訪神社
31	船霊社	天鳥船神	島根県松江市美保関町美保関608	美保神社
32	船霊神社	上筒男命, 中筒男命, 底筒男命, 猿田彦命	島根県松江市和多見町81	賣布神社
33	船霊大神	住吉荒魂神	香川県観音寺市八幡町1-1-1	琴弾八幡宮

出典：神社本庁教学研究所研究室編（1995）「平成「祭」データ」（CD-ROM）全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会にもとづき倉田作成。

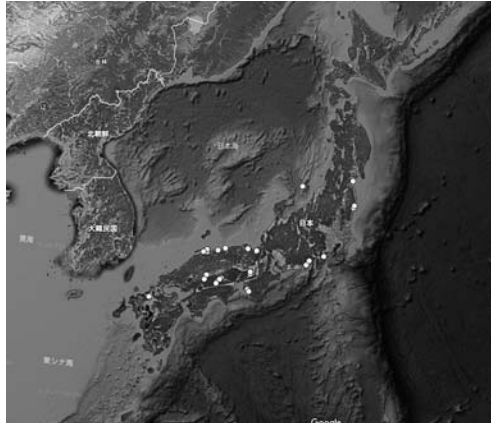


図2 境内社として確認された船玉神社の位置関係（Google mapより）

境内社は、全国14府県に33社あり、単立社（本社）と比べて神社数は多い。またその特徴を概観すると、単立社では確認されなかった点がいくつか浮上する。整理すると、まず鎮座地は、単立社の大多数にみられた沿岸部・湖畔に加え、島嶼部や川沿いにも見られるようになったが、いずれにせよ水辺という結果である。加えて、東北地方の日本海沿岸部と関東平野からは姿を消し、西日本のうち、山陰地方から瀬戸内海沿岸地域にかけて集中的に確認できる。祭神では、牧田説に従った猿田彦と住吉神を祀る神社が16社と概ね半数を占め、海神の綿津見神の名を目立つ。そのなかでとくに注目したいのは、単立社では確かめられなかった「船玉大神」あるいは「船玉猿田彦命」など、「船玉」と名の付く神格が確認できる点である。先ほどは、天照神が祭神の事例や、当地での信仰の厚い祭神が祀られる事例が特徴の一つであったが、よりローカルな存在となる境内社にあっては、その神名が直接的に「船玉」と結びつけられている、いわば対極的な方向性が観察できる。単立社とは異なって、境内社の由緒はデータベース上では確かめられない。そのため、各神社での本社・境内社を含んだ祭事の項目を確かめると、船玉の名のつく祭事が13社見られ、その参列者は特定団体や講社となっており、単立社の由緒でみた職能集団の祭事であることが示唆されている。

ここまで、祭データより単立社・境内社を確かめたところ、あわせて計51社だったが、それ以外にもウェブサイト上で「船玉」と冠する単立社・境内社の存在を

14社確かめられた。それらのデータを示すと、以下となる（表3、図3）。

表3 祭データ以外に確認できた船玉神社

	神社名	祭神	鎮座地	管理神社
1	船玉神社	熊野権現（素戔鳴尊）	和歌山県田辺市本宮町三越	熊野本宮大社
2	船玉神社	不明	徳島県美馬市美馬町妙見	
3	船玉神社	船霊様	千葉県船橋市宮本5-2-1	船橋大神宮
4	船玉神社	天鳥船命・猿田彦命	鳥取県境港市花町	
5	船玉神社	船玉大明神	栃木県さくら市上阿久津150	
6	正法寺船玉神社	不明	香川県坂出市大屋富町2053	
7	船玉神社	住吉大明神（底筒男之命、中筒男之命、上筒男之命）	神奈川県三浦郡葉山町一色2165	森山神社
8	船玉神社	猿田彦神	香川県高松市福岡町4-2	塩竈神社
9	京極船魂神社	住吉之前大神、鳥之取樟船之命、猿田毘古神	香川県丸亀市福島町	山北八幡神社
10	船玉社	不明	香川県坂出市林田町港一区	
11	船霊大明神	不明	香川県観音寺市流岡町820-1	加麻良神社
12	船玉杜	大海津美神、三筒男神、素蓋鳴命、息長足姫神	愛媛県八幡浜市保内町磯崎1558	客神社
13	船魂神社	住吉神、綿津見神	東京都中央区佃1-1-14	住吉神社
14	船玉神社	不明	徳島県鳴門市瀬戸町堂浦阿波井56	阿波井神社

注：各府県の神社庁および各神社のホームページなどを参照して倉田作成。

熊野本宮大社の奥の院といわれる1の船玉神社を除くと、これまでと同様に、海岸線や川沿いといった水辺に鎮座している。祭神としての特徴も、先の境内社に概ね準じるものだが、その名称が不明となっていて、ただ船玉神社という名だけで存する社も目立つ。また、確認できた由緒や伝承とあわせて特徴を確かめると、江戸時代に起源をもち、船大工や船頭といった職能集団が海上安全を願うた

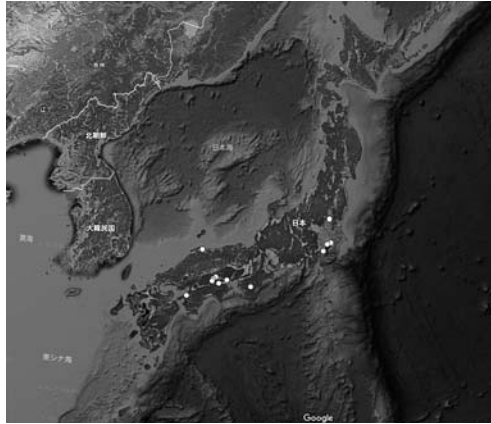


図3 祭データ以外に確認できた船霊神社の位置関係（Google mapより）

めに陸にも祀るようになったとあるが、他方、明治以降の比較的近年にもやはり同様の集団によって祀るようになったともある。加えて、正法寺船玉神社と、寺号を冠する船玉神社があるように、船玉の名が神社神道だけで見られるものではない点には留意したい。

ここまでのデータベース作業をふまえ、まず分布の傾向を祭データから確かめると、単立社は全国13道県に18社、境内社は14府県に33社と、神社数は増えているものの、都道府県数でいえばほぼ変わらず、鎮座地が特定の地域に集中している様子が看取できるわけだが、実際に地図上に目を移すと、単立社では鹿児島から北海道にかけて広域に点在していたのに対し、境内社では山陰・瀬戸内地域の海岸線に沿う形で密集した分布に変化している。また、祭神についていえば、祭データにある単立社から境内社、そしてウェブサイト上で収集できた神社へと、神社の在りかたがローカル化していくにつれて、祭神も牧田説にみられる記紀神話に出てくるような神格から、直接に船玉の名をもつ神が出現したり、その名が今日では不明となってしまう現状をうかがえるとともに、寺号を冠する船玉神社も見られるようになる。そしてそれを祀る主体には、船を生業とする職能集団があげられるが、江戸期には大名が勧請してきたという由緒があるように、海上安全を願う神格として重視されていた様子がわかる。

以上が、国内での分布にもとづく船玉神社の概況だが、本章冒頭で示したよう

に、瀬戸内海沿岸地域のうち、祭データ中の単立社・境内社に祭データ以外で収集した神社をあわせた全65社のうち13社と、神社数としても突出している香川県の船玉神社を抜粋し、今述べてきた概況を改めて確認したい。まず、香川県の船玉神社だけとりあげた図表が以下となる（表4、図4）。

表4 香川県の船玉神社の一覧

	神社名	祭神	鎮座地	管理神社
1	正法寺船玉神社	不明	坂出市大屋富町2053	
2	船玉神社	猿田彦神	高松市福岡町4丁目2	塩竈神社
3	京極船魂神社	住吉之前大神、鳥之取樟船之命、猿田毘古神	丸亀市福島町	山北八幡神社
4	船玉社	不明	坂出市林田町港一区	
5	船霊大明神	不明	観音寺市流岡町820-1	加麻良神社
6	船玉神社	住吉大神	綾歌郡宇多津町1644	宇夫階神社
7	船玉神社	鳥船神	高松市神在川窪町101	住吉神社
8	船魂神社	猿田彦神	坂出市大屋富町2313	巖嶋神社
9	船魂神社	猿田彦命、三筒男命	坂出市王越町乃生1780	梅宮八幡神社
10	船魂神社	猿田彦命、上筒男命	坂出市王越町木沢1621	喜佐波神社
11	船霊大神	住吉荒魂神	観音寺市八幡町1-1-1	琴弾八幡宮
12	船玉神社	鳥船神	高松市香西本町751	
13	船玉神社	鳥船神	高松市生島町685	

注：香川県の神社庁および各神社のホームページなどを参照して倉田作成。

まず、単立社が4社、境内社が9社あり、坂出市・高松市にまたがる、香川県の中央沿岸部に集中していて、その一つが寺号のある正法寺船玉神社となる。祭神は、不明を除くと猿田彦、住吉神、鳥船神の神格にわけられ、直接に船玉と名付けられた祭神は祀られていない。⁽¹³⁾ そのうち、坂出以西では住吉神を祀り、東とな

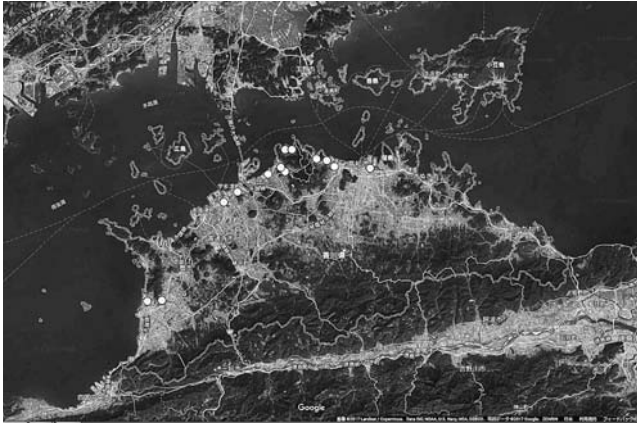


図4 香川県の船玉神社（Google mapより）

る高松では鳥船神を祀る傾向が見られるが、この傾向を説明するだけの記述はなく、その指摘にとどめておきたい。そして由緒には、塩などの運搬専用船の安全を願って勧請したり、京極丸亀藩の海上の守護神として船魂神社が祀られていたなどと伝わる。つまり概ね、先ほどの国内での概況と同じ様子を香川県にも見てとれたわけだが、それ以上の詳細をデータベース上から確認していくことは困難であるため、データベースにもとづき実施したフィールド調査の結果を次章で述べていく。

5. 船玉神社祭祀の実態－香川県を事例に－

本章では、香川県にある船玉神社を事例に、神社での祭祀や世話人、または現在の管理状況などを取りあげる。そして船上での船霊祭祀をふまえて、陸海での区別の所在をたどっていく。⁽¹⁴⁾

フィールド調査で見られた香川県の船玉神社の特徴を整理すると、まず基本的には港湾部や船着き場などの海辺に鎮座しており、神社自体は地域住民によって維持・管理されている。表4でいえば坂出市王越町の9、10の船魂神社が該当する（図5）。9の船魂神社の場合、鎮守の梅宮八幡神社とともに、船魂さんとして地域住民の崇敬を受ける。図5の社殿は、1978年に再建されたもので、乃生船主会や

王越漁業組合といった船舶所有者の集団の寄進碑が残されているが、それとは別に、地域住民も戸数割で再建費用を供出していた。祭礼日は1月10日だが、神職による祭祀の後に近隣住民で集まって宴席を開く程度で、神輿や獅子といった出し物などはなく、崇敬神社としての札も頒布されていないという。現在、上述した集団のうち、王越漁業組合に関しては、19人が所属しているが、内12人は70代以上と高齢化が進んでいる。



図5 船魂神社（坂出市王越町乃生1780、倉田撮影）

データベース上の記載だけではなく、実際に境内社として確認できる船玉神社の場合だと、地域の鎮守となる神社の境内を借りている事例もある。表4でいえば、6の宇多津町・宇夫階神社の船玉神社や、11の観音寺市・琴弾八幡宮の船霊大神が該当する（図6）。

6の船玉神社は、大型船の停留する港から内陸に物資を運搬する舢舨主の集団が、1935年に住吉大社から特別神爾を奉戴し、旧塩竈神社の社殿に祀ったことが始まりとある（宇多津町誌編纂委員会編 2010：240）。祭日は8月1、2日で、舢舨衆の担ぐ神輿が町内を練り歩き、川辺で水を打ちかけるような賑やかな祭りだったそうだが、同地の主産業だった塩業の廃止とともに、塩業に関わった運搬を仕事とする舢舨衆も姿を消し、社殿自体も1984年に宇夫階神社境内に遷される。遷座後も元の舢舨衆が世話人となって祭事自体は行われていたが、中心的な世話人の死去

や高齢化も進行したため、現在は宇夫階神社で管理するとともに、祭日にあわせて同社宮司が祭事を取り行っている。11の船霊大神は、香川県観音寺市の三豊海運協業組合が祀り始めたもので、琴弾八幡宮の境内に戦後に建立したという⁽¹⁵⁾。勧請元は不明だが、祭データ上で住吉荒魂神を祀ると記載があることから、恐らくは宇多津と同じく、住吉大社ではないかと推測される。祭礼日は4月第1日曜で、組合員が担っていたが、いつ頃からか行われなくなった。ただ現在も、参拝に来る世話人はおり、定期的に清掃もされている。

逆に、3の京極船魂神社のように、鎮守の山北八幡神社の境内に遷した社を、地域住民の希望で再度、元の鎮座地となる丸亀港付近に新たな社を建てて遷す事例も確かめられる。現在の山北八幡神社の境内には遥拝所が設けられており、社地を十分に確保できないことから、鳥居や狛犬をその遥拝所に残してきている（図7）。遷座後の世話人は、地域住民のうち、山北八幡神社の氏子総代を務めている人物が行っている。祭礼日は8月で、まるがめ婆婆羅まつりの日程のうち、花火大会の時刻にあわせて行われる。山北八幡神社の宮司が祭事を行い、全地区の氏子総代が参列する。婆婆羅まつりの会場の一つが京極船魂神社付近にあるため、祭りの当日は賑わいをみせる。2009年には神輿を船に乗せて沖に出る船渡御が行われたという。



図6 境内の船玉神社（左が船霊大神で右が船玉神社、倉田撮影）

香川県は塩業が盛んな地域だったことから、塩業の神となる塩竈神社と一緒に祀られることもある。2の高松市福岡町の船玉神社もその一つで、塩釜神社の片



図7 港湾前に建てられた京極船魂神社と遙拝所（左が神社で右が遙拝所、倉田撮影）

脇にたたずむ社の由緒書きには「塩釜神社と同じく天保九年頃猿田彦の神さまをお迎えいたし、塩、石炭、フクベ砂等の運搬専用船の航海無事安全を祈って永く当所関係業者の間で崇拝されてまいりました」とある。また、先ほどとりあげた6の船玉神社が勧請された経緯も、塩業と密接に関わる船客が、住吉大社から勧請してきたとあり、地域での主産業との関係性のなかで祀られるようになった様子もみられる。

その他にも、京極船魂神社に見られる例外はあるものの、世話人あるいは主要な集団での高齢化が進み、祭事が行われなくなりつつある事態がうかがえる。極端には世話人が管理を行えずに、いわば境内を貸している立場の神社が管理までを担う状況にある。また、日常的な祭祀を例にとってみれば、家庭内で祀る神棚には、神宮大麻、氏神社、崇敬神社の札を納めるわけだが、漁業や海運業者にとって崇敬神社に相当するはずの船玉神社の頒布物が、神棚におさめる札も含めて特別に確認できるわけでもない。端的に言えば、陸上での船玉神社のうち、船舶を守護し、海上安全をもたらすという役割を積極的に果たしている場所があるとすれば、それは極めて稀な事例ではないだろうか。

ところで、この船霊への信仰がとりわけ厚く見られるのは、当然ながら、実際に海上を生業とする漁業、運搬業（貨物船、旅客船など）といった職業に従事する人々で、香川県でも船玉神社を勧請してきたのは、これらの職能集団であることはすでに見てきたが、いま一つ、実際の船上で船霊を祀る様子を見ることで、陸・海における役割分担は明らかになるのかという問いを立て、とくに今日の船

舶保有者に着目しつつ検討したい。具体的には、船玉神社では確かめきれない、船上での船霊信仰を概観する。

船上における船霊信仰の概要は2章で確認した通りとなる。香川県を含む瀬戸内海沿岸地域での船霊の形体は、大きく分けると、有形と無形の2パターンがあり、前者は、帆柱を差しこむ筒や船梁の中央、あるいは船上での神聖な場所に駒状の厨子や札などを祀るもので、後者では帆柱を立てる筒全体や船の中央部分になる船梁など特定の場所を神聖視する（瀬戸内海歴史民俗資料館編 1979：210-211）。詳細は別論にゆずるが、木造船からプラスチック船への切り替わりが進んだ今では、船霊が祀られる場所は帆柱や船梁ではなく、操舵室やエンジンルームといった場所に移っていて、船霊として扱われるのも、札ではなく木を駒状にかたどったものになる。今回のフィールド調査から述べると、駒状の船霊は漁船のみに祀られており、例えば砂利運搬船やフェリーでは船霊ではなく金刀比羅宮の札が祀られていた。ただ、後者の札はあくまで「海の神」である金刀比羅宮であって船霊とはみなされておらず、この神格の区別は漁師も同様に行っている。そのうえで、漁師は船霊と一緒に海の神の札も祀っている。

また、船上の船霊に関わる主な儀礼に、年の初めに海上安全と豊漁を祈り、船霊を祀る「フネノリゾメ（乗りぞめ）」と、新造船を作った際に行う「フナオロシ（船下ろし）」があって、船下ろしのうちでもとくに、船霊を船大工の棟梁が船に祀る儀礼を「オショウネ（お性根）を入れる」という（瀬戸内海歴史民俗資料館編 ⁽¹⁶⁾ 1979：215）。この船のお性根入れによって、上述の船霊が作られる。ただし例えば、この儀礼を行う場に船玉神社が選ばれるといった話はない。加えていえば、現在も船上に船霊を祀る漁師であっても、自地域で船玉神社を祀っていない場合、船玉神社自体を知らない、聞いたことがないという答えが返ってくるのがままあった。

以上の点を総括すれば、船上の船霊と船玉神社は直接の関係をもつものではなく、また船玉神社を祀ることも、一般的な話ではないと述べられる。それでも、船玉神社を船上の船霊と関連させ、その神格についての位置づけを与えようとするならば、それは船霊という民間信仰と、霊験あらたかとされる金刀比羅宮のような大神社、その中ほどの神格を有していたのだと考えられる。陸でも祀りあげること、地域住民や職能集団に一層の利益をもたらす存在だったのだろうが、

現在の船玉神社に、その痕跡をうかがうことは難しい。

結論

以上、船玉神社データベースおよびフィールド調査にもとづく、船玉神社の役割と祭祀についての検討を行ってきた。結論から述べるならば、現在の船玉神社が有する役割が何であるのか、また船上の船霊との区別がどのように行われているのか、信仰という行為を考えるうえで根本的といっても過言ではないこれらの点に対して、積極的な説明を与えることは困難だと言わざるを得ない。ミャンマーのナッ信仰から例をとれば、船霊が船を守り、海の神であるウー・シンジーが海の状況を管理し、村の祠や地域の守護神ボーボーギーが船上の漁民を守護する、こうした役割分担のなされた、複雑だが合理的な信仰体系が構築されている（関2017：53）。転じて日本の場合だと、船霊と海神の役割は明確なものの、村の祠やボーボーギーに相当する船玉神社の役割が、浮かび上がってこないのである。なぜ明確にならないのかという点の手がかりは、引き続きミャンマーの事例と比べていくことで与えられる。ミャンマーでは「ナッの役割分担は、人間がナッを使役して自然をコントロールしようとする試みであり、ボーボーギーやナッへの願掛けが言わば神と人間の「契約」で……自分に「必要」だと考えられるナッを選び出し、選択された神々と契約関係を結ぶ」（同上）わけだが、日本の場合、明治期の神仏分離に加え、戦前・戦後の価値観の断絶や戦後の市街地調整による神社整理／統廃合、という出来事が挿入されたことによって、住民が必要とする神々との契約といった信仰体系が大きく切り離され、複雑さだけが残った。いいかえれば、前章の最後に述べた、陸上での中ほどの神格を保っていた存在との関係性が、いったん途切れたわけである。香川県の事例に関して述べると、明治から昭和初期にかけて、船玉神社が勧請されている点は興味深いと言えようが、データベース上の単立社・境内社の区分に戻ると、単立社では「船玉」の名を冠する神格はなく、境内社を見ることで初めて発見される。これは神社整理による祭神の統合で、陸の船霊という神格が切り捨てられたことを端的に示す。以降、船玉神社は、祀り上げられることもなく、祀り捨てられることもない、いわば人々から信仰への積極的な態度が表明されないまま、ただ揺蕩う神格になってしまった

のではない。データベース上で、船玉神社の数がとりわけ多い香川県下を調査した結果、このような現状が浮き彫りになったが、果たしてそれは全国的にも当てはまるのかどうか、残された課題となろう。また、これらの船霊神社が各地域に勧請された時代において、漁民の信仰体系の中でどのような役割を果たしていたのか、その点についてもあまりにも不明な点が多い。船霊信仰研究の中で、すっぱりと抜け落ちてきた感のある船玉神社の歴史を再構築するのは、多大な困難を伴う作業であることは間違いがない。前章で筆者は船玉神社が漁民・船乗りの信仰の中から自然発生的に生まれた存在とは考えにくいと述べたが、なぜ当時その地域で船玉神社を勧請しようという動きがあったのか、そしていつからその社が顧みられなくなったのか、について考察することは、日本の漁村文化を歴史的に知る上で重要な手がかりになると言えよう。これらの詳細については、また稿を改め論じたい。

本論文は、科学研究費補助金（基盤研究B）「東アジアにおける宗教的シンクレティズムの社会学的研究－日本・中国・東南アジア」（研究代表者・関泰子）により2015年4月～2018年2月にかけて行われた「船玉神社データベース」作成作業の成果に基づく。

注

- (1) 「船霊」は神社名としては「船玉」「船魂」と表記されることが多い。本論文では原則として船上での信仰を「船霊信仰」とし、神社名としてはそのまま「船玉／船魂」を用いる。また、船霊信仰についても、引用する文献に「船魂」「船玉」と記載されている場合は、そのまま「船魂」「船玉」表記を用いる。
- (2) 牧田は、男女一對の人形・女の毛髪・賽2個の4種を納める場合をもって標準とする、と述べている（牧田 1966:160）。
- (3) 牧田は、男女の人形・毛髪・賽・十二文銭などの御神体を納めることが船霊信仰の姿である、という説に疑問を呈している。元々の信仰は御神体の必要がなく、後世になってこれらの品々を納める習慣が付加されたと考えている（牧田 1966:154）
- (4) <http://www.sumiyoshitaisha.net/grounds/sessya.html>
- (5) 神野の調査（静岡県）では、古い船から取り外された船霊の御神体は船主の家の神棚に祀ら

- れている（神野 2000:130-145）。
- (6) 4章と5章の内容は、「倉田健太（2017）「船玉神社データベースと瀬戸内の船玉神社祭祀」平成29年度第3回アジア神仏研究会報告原稿」にもとづき、大幅に加筆・修正を加えたものである。
- (7) 神社本庁教学研究所研究室編（1995）「平成「祭」データ」（CD-ROM）全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会。
- (8) 祭データ以外で調査した地域および参照したウェブサイトを記しておく、瀬戸内沿岸地域では大阪府、福岡県、香川県、愛媛県、和歌山県、岡山県、広島県、山口県、徳島県を、それ以外の地域として三重県、新潟県、鹿児島県、熊本県を設定したが、必ずしもこの地域だけに限るものではない。主な参照先は、各府県の神社庁および各神社のホームページなどとした。
- (9) 注5でも示した通り、「船霊」の表記は様々ある。本論で取り扱うデータベースでは、その検索語を「船玉、船霊、船魂、舟玉、舟霊、舟魂、舟靈、ふなたま、ふなだま」としている。
- (10) データベースのうち、鎮座地（住所）は、祭データが公開された1995年当時と以後で名称が変わっている事例がみられたため、その場合は適宜、現在使用されている住所に修正している。
- (11) 祭データでは祭神が記載されていなかったが、石川県神社庁のホームページで確認したところ、「天照皇大神」と記載されていたため（石川県神社庁（2017）「船玉神社」（2018年2月10日取得、<http://www.ishikawa-jinjacho.or.jp/shrine/j0863/>）、後者を採用している。
- (12) 「平成「祭」データ」内の項目が「境内社名」となっているため、それに準じて境内社と扱っているが、実際には境外に社が設けられている事例もある。
- (13) 1ヶ所だけ、祭データ中から、香川県木田郡三木町に鎮座する雷八幡神社の境内社となる船頭神社で「船玉神」が祀られているのを確認したが、船霊神社ではないためあえて除いている。また、データベース外の情報ではあるが、香川県三豊市仁尾町に鎮座する「蛭子神社」では、通常は船内に祀る駒状の「船霊」が祀られている様子を確認できる。
- (14) 2章で扱った、いわゆる船霊信仰については、別論を参照のこと。
- (15) なお、三豊海運協業組合自体は、2015年9月30日付で解散している（LogisticsToday（2017）「三豊海運協業組合（香川）が解散」（2018年2月7日取得、<https://www.logi-today.com/283369>））。
- (16) 性根を入れる儀礼の際に読み上げる祭文は複数の系統があって、神官、僧侶、修験者、船大工と別れているというが（瀬戸内海歴史民俗資料館編 1979：215）、これは、船のお性根入

れという儀礼を司る主体が船大工に限定されるものではないとも読みとれる。例えば、広島県尾道市向島町の厳島神社のサイトをみると、出張祭典の項目に「工場内の神棚・船舶の船霊等の準備もさせていただきます」とあるが（尾道・向島厳島神社（2012）「出張祭典・祈願」（2018年2月8日取得、<http://www.itsukushima-onomichi.com/prayer.html>））、同社の出張祭典を本文中でのお性根入れとみなせるのではないか。

参考文献

- 宇多津町誌編纂委員会編（2010）『続宇多津町誌』宇多津町。
- 神野善治（2000）『木霊論』白水社。
- 川崎晃稔(1984)「船霊と刳舟」日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系』5、國學院大學、335-355。
- 楠本正（1993）『玄界の漁撈民俗・労働・くらし・海の神々』海鳥社。
- 倉田健太（2017）「船玉神社データベースと瀬戸内の船玉神社祭祀」平成29年度第3回アジア神仏研究会報告（11月11日於大谷大学）。
- 下野敏見（2005a）『南九州の伝統文化－祭礼と芸能、歴史』南方新社。
- 一（2005b）『南九州の伝統文化－民具と民俗、研究』南方新社。
- 神社本庁教学研究所研究室編（1995）「平成「祭」データ」（CD-ROM）全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会。
- 関 泰子（2017）「ミャンマーにおける精霊信仰－漁民の船霊信仰を中心に－」『論集』153、29-56。
- 関山守彌（2005）『日本の海の幽霊・妖怪』中公文庫。
- 瀬戸内海歴史民俗資料館編（1979）『瀬戸内の海上信仰調査報告（東部地域）』瀬戸内海歴史民俗資料館。
- 野口武徳（1972）「南島の船霊信仰」古野清人教授古希記念会編『現代諸民族の宗教と文化－社会人類学的研究－』社会思想社、249-267。
- 野地恒有（2008）『漁民の世界-「海洋性」で見る日本』講談社。
- 真弓常忠（2003）『住吉信仰』朱鷺書房。